

芸術の病理

—パトグラフィのめざすもの—

出席者

野村 章 恒
 春 原 千 秋
 加 賀 乙 彦
 椿 八 郎

司 会

時 昭・44・5・28
 於 南 國 酒 家

椿 きょうはお忙しいところを先生方に特別にお集まり願ひまして、パトグラフィという医学と文芸の申し子のようなものについてこれがまだ新しい学問だものだから、医家芸術の既者あまりこういう新しい学問を知らないわけなんです。それで、ぜひこの学問の理解を深めるようなごく初歩的なご説明からお願いしたいと思ひまして、お集まり願ひたわけなんです。

野村 先生、欧米におけるパトグラフィの歴史というものをひとつお話し願ひたいんです。

野村 私が日本精神医学全書で、パトグラフィのアウトラインを書きましたが、パトグラフィということばの出場所、これは椿先生のほうのご専門のメイビウスが初めてニーチェの論文で使ったものです。それが、一九〇二年ですから、ちょうど私が生まれた年です。

椿 それじゃ今世紀に入ってからですね。

野村 それで、メイビウスの論文を日本に紹介したのは四十年ごろですか、松原三郎という人が「哲学者ニーチェの精神状態」という抄録みたいのを載せたんです。

椿 その松原氏は医者ですか。

野村 最初に病跡学というテーマをもらったんです。パトグラフィを訳して。

椿 それはどなたからいただいたんです。野村 それは神経医学会の用語委員というのがいますして、そういうのがパトグラフィを病跡学とつける。それでちょっと前にさかんになったのは、ランゲ・アイヒバウムという人がパトグラフィの本を出しているんです。ニーチェの研究という問題ですね。それから日本でも、戦後、非常に急速にさかんになったというか、注目されるようになったわけなんです。

椿 その後の日本におけるパトグラフィの経過というものはどんなものなんです。加賀 結局、ぼくなんかのように戦後に精神医学の勉強を始めた者としては、はじめて接した病跡学の本という野村先生のポートの本なんです。あれは昭和二十三年ですね。あの本がちょっとした波紋を若い人たちに与えたことはたしかで、ランゲ・アイヒバウムの、今いわれた翻訳が出たのがまたちょっと遅れると思うんです。そのころは、病跡学とい

いきましたね。病跡学というかたちで、なんとなく日本でもやろうという気運がでてきた。戦前の研究というと、今のお話のよう

野村 鳥嶋の精神科のお医者さんで、高藤茂吉の先鋒です。茂吉はヨーロッパ留学のときリッペンにあるニーチェの墓へおまいりした歌があります。随筆集にも「ニーチェの病

氣」というのがあるんですね。ですから、このころから初めて病跡学というものが入ったんですね。

ですけれども、富士川澄先生、あの医学史の大家ですね、この先生が書いたものに、家康の身体のことか、頼朝の病氣とか、そういうような病跡学とはいえないけれども、古い英雄、偉人の病氣について論じてるのがあるんですね。そして、パトグラフィというのを最初に病誌と訳したんです。大阪の病理学の先生で、おもしろい随筆を書く田中香蓮という先生が「文芸と偉人」とか書いています。

その先生も、秀吉とか家光とか、精神病学的人物論というのを書いていっているんですね。この人は病跡学とか病誌ということばを使っています。病理学者でしたから。それから、吉松修夫先生とか、岸本進一先生は、優生学の中で、天才の病誌ということばを使っているんですね。

椿 それは日本における病跡学ですね。欧米におけるのはもっと前ですか。

野村 欧米はロンブローゾの天才高貴論から始まって、メイビウスにきて……。

椿 それは何年ごろですか。

野村 ロンブローゾは一八六四年に発表しましたから、メイビウスよりもちょっと早いでしょ。今世紀に入ってから版で、辻潤訳が大阪の初めに出版されて読まれたものですね。

椿 そうすると割合に早く日本に入ってきたんですね。

野村 入ってきていますね。昭和四年ごろに初めて学会で、病跡学とはそのころいわなかったんですね。でも、巖石という人は神経質な人だとかいうことを佐藤政治という森田先生の弟子でしたが、しゃべったんです。そのときに、王丸勇先生が、信長、秀吉、家康という人の性格と性格、その関係を学会講演でやっただけです。ですから、これあたりが病跡学の初めといえますか。そのころまだ病跡学という言葉はありませんでしたけれども、病跡学とはつきり訳の出たのはいつごろなんですか。

野村 私が昭和四十年に、精神医学全書が出たときに、特殊項目というので、病跡学というのを受け持たされたんです。そのとき

に、だいたい大きな研究ではなくて、学会での発言とか随想とか、そういうかたちのもので、まとまったものは少なかったわけです。戦後、日本の芸術家を対象として病跡学が始まったのが、昭和三十三年にでた例の塩崎敬男さんの本です。「漱石と龍之介の精神異常」、この方が恵出の方ですね。

野村 そうです。

加賀 その方あたりが初めてじゃないでしょうか。

野村 まとまった本として出しましたのは初めてですね。

加賀 日本の芸術家を対象としたものとしては初めてだった。

楠 単行本で出たんですか。

加賀 単行本で出た。それから、二、三の雑誌に、たとえば「国文学解釈と鑑賞」、あるいは「医事新報」「医家芸術」もたぶん出ているかもしれない。そういうことで、昭和三十六年から七年前から、なんだかたくさん出ました。作家論が、取上げられた作家も、今までの漱石や芥川や太宰のほかにもたくさん出てきたのです。いま、病跡学の流れというのはこの頃からのたくさん出はじめた時期に、まだあるわけです。日本の病跡

学は今やと始まったところ、十年くらい前から。

楠 それで、式場さんがゴッホをだいたい、つづいたんですね。あれも病跡学の中に入るんですね。

野村 式場先生のほうは、芸術病理学ということばを使ったんです。それで、先生が書いたのが昭和七年ですから、もう相当お古いんですね。あの先生の名著は、ゴッホとい



野村章恒氏

うのはクライストという人が診断した、挿問性もろろ状態という診断をして、伝記をずっと詳しくおとりになったわけです。そしてもう一つは、あの先生の名著の第二部の下巻のほうは、ビブリアオグラフィです。書誌学です。ですから、書誌学を大切にしたという点で、病跡学のいちばん大事な項目として、ゴ

うの天才としてのポーの人物と作品との関係、狂気というものがどう作品を推進したかという関係がまだはつきりしないとおっしゃっていました。

春原 こんど先生が大作をまとめられてお出しになるんでしょう。それを拝見しようと思しみにしております。

野村 こんどは向こうへ行って、遺跡をまわってきたこと、それから病跡学をやるのには、いちばん大事なものは評伝というものは、トリチカルな批評がある、トリチカルバイオグラフィ、それを基本にしなければだめだ。崇拜者の伝記、誦読する側の伝記というものだけでやると、片寄っちゃう。さいわい、一九三四年にタインという人がトリチカルバイオグラフィというのを書いたんです。こんどはそれを徹底的に読んで、伝記というものを全部、書き直しました。

楠 それで野村先生、ランゲ・アイヒェンワム、の天才分類というのがありますね。すなわちバイオグラフィの対象になる人間の分類というものが、それを簡単にご説明願いたいんです。図でお書きになったものがありますね。

野村 これは天才というものを、天才の人物というものと、天才の仕事というものと、



志村千秋氏

天才がその仕事によってどういう名声を得たか、そういう批評のしかたなんです。作品として傑作がある、ポーの場合ですと「黒猫」とかそういう傑作がある。傑作とその当時の社会への受け入れられ方、名声、それからだんだん百年たっても名声が消えないというところに、精神医学的に見て、いわゆる愛賢者、人物のゆがみのひどいものと、ですから、その

時代には愛賢者で入れられないわけですね。ですけれども、作品となると傑作として名声がいつまでも続いているというようなものを、一般の人にしたいわけですね。あと、こんどは普通の健康な人でも作品はできるわけですから、そういうもの、スタンダードラインを引いて、マイナスなどオネガティブということばを使っておりますけれども、世の中にあ

ッホを扱った、病跡学の仕事としては、いちばんの先駆者ですね。

楠 野村先生のポーの著書、私も非常に興味をもって読んでます。精神科の先生方はあれをどんなくいにお読みになったんでし

ませんか。

春原 私は、じつはよく読んでないんで申しわけないんです。最近医家芸術にお書きになったのは興味深く拝見いたしました。

楠 あれまで、ポーをあんなふうにつ

こんで書いた人はなかったわけですね。

野村 ありません。ですから、あのころは二十三年、戦争の直後の、楠先生が司会なすって、ポー没後百年祭、あの講演をしたころには、病跡学ということばは出てないんです。ですから、私の頭も進んでいませんでしたので、「精神学的に見たポー」とか「精神病理学的立場から見たポー」とか、そういう天才研究の対象としてのポーだったんです。

楠 です。それからあれを読みますと、少しバラバラなところがあるんですね。系統の乱れたところがありますね。まだほんとうに固ま

ってないんですね。

野村 固まってる。だから、島崎敬樹教授が医事新報に書評を書いたんですが、ほん

まり受け入れられなかったマイナスの点が強くて、だけれども作品は輝いている。ワイルドのようなものとか。

楠 あれ、十二種類かなんか分類したんですね。

野村 分類したのを私、出していますけれども、やっぱり社会的には評判がよくなかった、しかし精神的には健康であったという一つのあれと、それから天才というものの素顔と、名声高の低い者と、それから平均的人間というふうなので分けたわけですね。

楠 それで、ごく常識的な人物で、いい作品をつくった芸術家がありますね。そういう人も、やっぱりバイオグラフィの対象にはなり得るんですね。

野村 それを取上げて論じているのがランゲ・アイヒェンワムなんです。ですから、人物が多いです。取上げた。

楠 私は、朝倉文夫なんて人は、非常に円満な人だと思っ

た。ああいう人が、ああいうふうな作品を現しているわけなんです。ああいう方なんかも対象にはなり得るわけなん

がいるわけなんですか。

野村 ポードレルとか、ケルケゴールとか、オスカー・ワイルドとか、そのほか、カント、カフカ、ヘルダーリン、先ほど出ましたゴッホとか「職倫録」のルッソー、ゲーテも入っています。ドストエフスキーのてんかんとか、たくさんおられますよ。ランゲ・アイヒバウムが取上げたモーパッサンにしても、シェーマンにしても、たくさんおられます。

榎 それは文藝家、音楽家、その他いろいろな芸術の人が入ってるわけですね。芸術の人が主ですか、それとも政治関係、軍人なんかも入るわけですか。

野村 天才というものを最初、詩人をいけばん上段にすえて、芸術家、文学者じゃないと天才といわないというきびしいあれがあったわけですね。ところが、三木清という哲学者が「哲学ノート」に書いてますけれども、だんだんと一般社会、政治家、軍人とか運動選手とか、音楽家、舞踊家、そういったものに広まったわけですね。

榎 それはいつごろからですか。

野村 ランゲ・アイヒバウムが取上げた時代でしょうから、ゲーテ以後でしょうか。どうもテストされているようで、あまり勉強し

したという……。

榎 あれば慶大文学部を途中でなまけてやめてたんですね。陽転のときにゴロゴロして家で寝ころんでいたものだから、うまく陽転を過ぎちゃった、そういうことを自分でいってました。おそらく陽転の時期だったんでしょう。

春原 宇野浩二なんかたしかおもしろいですね。

野村 宇野浩二は「出世五人男」というのを報知新聞に書いてまして、途中で書けなくなった、青山の病院に入ったわけですから、陽転後じゃなかったかと思えます。

春原 私は子供のころ、宇野浩二というのは童話作家だと思っていました。ほくらが子供のころ、盛んに少年クラブなどによく書いておりました。今考えるところと「監獄」のなごったあとの時期だったわけですね。

榎 宇野浩二の手紙というものが残っていますが、これがじつにきてくれたものですね。ハガキで書いていて、途中で横に書いていたり、注が入っていたり、まことにへんなものです。それは長沼弘毅という人がたくさん持っています。最近、長沼弘毅がそれをまねしたハガキを私のところに送ってよこ

す(笑い)

榎 日本におけるものはどんなものでしょう。

春原 今までに発表された文学者は、歌石、龍之介、藤村、泉鏡花、倉田百三、葛西春原、辻潤、島田清次郎、それから実際に発表されているのは……。

榎 隅外なんかあがってませんか。



加賀乙彦氏

春原 隅外というのはおもしろいけれども、なかなかとつきにくくてむずかしい。隅外全集を全部読んだ人は、なかなかいないんじゃないでしょうか。

加賀 隅外も、もちろん対象になります。

春原 最近の作家は、常識的な人が多くあまりおもしろくなくなっちゃったですね。でも、明治、大正、昭和の初めごろまで、ずい

すんです。だから少し似てきたんじゃないですか。

榎 それで、日本の人物で、私は文芸家以外に松井須磨子とか、あいう人がやっぱりバトグラフィの対象になるんじゃないかと思うんですがね。ことに私は、宇野浩二の作品の中にもありますがね。下諏訪でもって書者と一緒になって、細君にするわけなんです。これ



八郎氏

がやたら、けんかをふっかけるんです、宇野浩二に。けんかをふっかけるのをだんだん見ると、メンスの前なんです。それがわかったんで、相手にしないんだと書いてるんですが、松井須磨子がやっぱりそうらしいです。じつにわがままで手におえなくて、弟子どもが抱月はなぜあれをとめないんだといって、憤慨するんですが、それがやっぱり、メンス

ぶいろいろな作家がおられますから、いくらかもあるというとおかしいですけれども、二十人や三十人は、興味のある人物が文学者のなかにもあるんじゃないですか。

野村 いちばん古いところは頼山陽にいてるんです。頼山陽の青年時代、これは放蕩者で、藩で監禁されたりして、あれはお母さん、おじいさんとか、みんな字者で、カバリーしたからりっぱな詩人であり、文学者になったんです。青年時代はあまりよくなかったらしい、素行が。そういうようなことを論じたのが、高峯博士のお仕事です。

加賀 それから久保栄とか、あといっぱいいるんじゃないですか。

春原 ほくらが今までに書いたものでは、鹿花、塚木、龍之介、漱石、浩二、荷風、中野などですが、葛西春原、牧野信一、喜村磯多とか、堀井基次郎といった私小説の作家、それに太宰治、坂口安吾、田中英光とか、織田作之助といった、無頼派の作家を調べてみると、ずいぶんおもしろいんじゃないですか。

榎 佐藤春夫なんかもほり得るんですか。

野村 佐藤春夫も何歳くらいでしたか、神経衰弱期がありますね。なんか奥さんと交換

の前に非常に興奮して、わがままいって、けんかふっかけて、乱暴気ままする女じゃなかったかと思うんです。松井須磨子が首くくったところへかけつけた人が、あの台のところに血がしたたっていたと書いてる。やっぱりメンスだ。首くくる前にけんかして。だからそういう肉体的に病的な一種のものがバトグラフィで大きな意味をもっているんじゃないかと思うんです。それで、外国でもカイゼルとか、日本では天勝なんかいい対象じゃないかと思うんです。最近、天勝のものを書いた本が出ましたね。それを見るとわかると思います。チャップリンとかエジソン、あいう人も当然なり得るものじゃないかと思えますが、いかがなものでしょうか。

野村 私が作品をずっと読んでみて、精神医学的に正しいと思われるのは、山本有三の「風」の中に、てんかんの有覚性躁狂状態で、人を殺すんですが、そのときは意識がはっきりしていた。しかし、殺しちゃってからはおぼえてないといううなのを取入れられてるんです。そういう点で、山本有三さんも戦前、松沢樹英へ「風」の主人公のあれを書くのに聞きに来ましたけれども、私、ずっと精神病者を扱った作品を見ると、やっぱり、

川端康成にも「狂った一頁」というのがあった。それはムラメルージュかなんかでやったんですが、あれなんかのときは、精神病者を扱うのに、狂ったというのは、ただ通り狂うというような状態だけで、あまり詳しい心理的表現がなかった。ですから、芦原将軍を取扱ったんです。ただ将軍のセスチャーだけを取扱った。こんど明治屋でやったんです。まだ芦原将軍の扱い方、森繁さんのテレビで見ても、なんか扱い方が心理的に深みがないですね。ですから、私は、芦原将軍の扱い方は、精神病学的に見ると、お芝居のほうは、あまり賛成しないんです。たしかに芦原将軍でも診断がずつとかわってるんです。錯迷狂から誇大妄想に躁鬱病というふうに変ってるんです。そのところが病跡学をやるのに、時代的に治療も進歩するし、精神病理学も進歩するししますから、ものさが違っていくということが私どものほうでも反省しなければならぬところがあるんです。

楠 次に、パトグラフィの追跡の手順の価値というものが、そういうものがいろいろあると思います。たとえば家系というものが大切ですね。家系というものについて、非常に特徴のある人物はどんなものだったでしょう

とえば真性てんかんなんかのように、遺伝にある程度、規定された病気の場合は、遺伝が重要になってきますし、それからノイローゼや、心因反応のようなものですと環境というのが重要になってきますし、両方とも考えなくちゃならないわけで、そういうのを精神科医のことばでいえば、ダイナミック・サイコロシーとか……

たということもあるし、両方からなってるんですね。先生。

楠 おいたちと同時に環境ならびに教育、それから当時の世相というものも、だいたいは人物に影響するわけですね。

加賀 たとえば、例の無頼派の太宰にしても田中英光にしてもそうですが、あの人はほとんど片寄った性格の持ち主であることはたしかなんですが、彼らが無頼派の中毒になったり、かなり乱れた生活をしたというのは、戦後の混乱期を考えなければなりません。その点はいつものどちらというところはないのが真実じゃないですか。それから、春原先生がおやりになった久保菜の場合なんかはやっぱり、芸術上の悩みということがあってゆらゆらつになった面もあるし、それから体質的にうつ病という病気がそのときまたまた出

たというところもあるし、両方からなってるんですね。先生。

楠 春原先生、教育というものがその人物に影響するものは大きいわけですが、こういうものを実際に影響したパトグラフィの対象人物というのは、どんな人ですか。

春原 さあ、あまり教育を受けなかったためにストレスになって病気になるということですか。

楠 あるいは教育を受けすぎたために、それが影響したというのもあるわけですね。芥川なんか教育を受けすぎたんじゃないですか。

加賀 それはもちろん努力もあるでしょうけれども、ゲイテの場合は小さいときから自然に詩が生まれたといえますね。歩いていても自然にこぼれが生まれてくる。天性の才能というのは明らかにあった。もともとゲイテが詩人になったのは、法科大学にお父さんの影響で押し込まれて法律の勉強をさせられ

て、その間にかえて詩ができたという面はあります。体の病気でいいし、精神病でもいいし、環境からくる東縛でもいいし、そういう周囲からくる圧迫感というのが、逆に創作に作用するということは、かなり一般的にパトグラフィのときにいえるんじゃないでしょうか。

いて、そしてその中から新しい文学活動をしたというのでしたら、正岡子規なんか著明な人ですね。あれなんか、痛い骨の結核と闘いながら、歌でもあれだけ書き放いたんですから、病気が天才を努力させたというこは、いえましようね、子規の場合は。

加賀 つまり、健康な天才というのはありえないということもいえるんじゃないかと思えます。なんらかの意味で、どっかに欠陥をもって、その欠陥に悩んだ人間は、かえって芸術家としては独創的になる。たとえば、あれだけ恵まれた環境に育ったゲーテが、もしうつ病という病気をもっていなければ、あれだけ深みのある作品を書き得なかつたんじゃないかというこは、いえると思えます。たとえば最初の「若きウェルテルの悩み」だつてある意味では、うつ病期の作品ですね。ようするに自殺がテーマになつてゐるんですけども、それがそれまでのゲーテの明るい青春の喜びをうたつた作品と、ガラリと変わったものが生れたというのには、病氣のおかげです。日本の作家でいへば漱石なんかでもそうで、診断上はいろいろ問題がありますけれども、私自身は三回、うつ病期があつたと見ているわけです。若いときのうつ病期というものが

なければ、彼はおそらく松山まで逃げていかなかったでしょう。高松の東京のポストを投げうって、松山の一地方の中学教師になつちやう。ところがなつたおかげで、正岡子規と深い交際ができるし「切つちゃん」の素材になるいろいろな環境がそこで生まれてくるし、うつ病から回復したときのいろいろな気分というようなものがたくさん俳句をつくる。そういう時期を通らなければ、おそらく漱石の初期の作品は生まれてこなかつたと思えます。もちろん「切つちゃん」もそうでなし、それから「吾輩は猫である」も。

楠 「猫……」もやっばりうつ病のときに……。

加賀 最初は二十二、三歳、三十四、五歳でロンドンへ行つてるとき二回めのうつ病期がきて、これが一年半から二年くらいの間続いて、帰つてきたときまだ続いて、回復されたとき、ホトトギス一派の人々と交際し、だんだん軽い軽躁状態になったとき「猫……」を書いた。ですから「猫……」はちよつと躁的ですね。ある意味では奔放だけれども、ある意味では構成がゆるいというか、連想が非常に豊富で、意図あふれるかたちの作品を書いている。だけれども、その中にうつ病期のこ

がい経験は盛り込まれてゐるわけです。明るいコミックな作品ですけれども、そういうこで、うつ病というものが漱石の作品に深い陰影を与えたということは明らかにいえると思ひます。ある意味ではまったく健康な芸術家なんてつまらんですね(笑)。

野村 つまらん(笑)。

楠 そういふ一種の病的な性格というものが、趣味にも嗜好にもあらわれるわけですね。娯楽とか、あるいはボーのように固におぼれてしまふということにあらわれるわけですね。そういう病的な例はどんな人があるでしょう(笑)。

野村 嗜好品、酒でもヒロポンでもいいですけれども、そういう嗜好品に逃げ込んで苦しみを忘れようとする、あるいは忘れようとした作家、中絶、そういう分類と、自分とは神経衰弱は意識してゐるけれども、ほんとうに精神病でもない、自分天才というものをもつてゐるという漱石のようなものと、こんどは最近の作家ですと、耕治人さんのように、発狂したということを経験して意識して、発狂といふものがだんだん、九年間も薬を飲み続けていて自己を失つた。自己を失つた後に書いた。あるいは病院で療養し

た体験を、「一糸の光」という作品に非常によく取上げられてゐるらしいですけれども。

楠 そういふふうに、自分が病気を体験したというこを書いてくれた人。坂口安吾にしても、詩人の千家完吾さん、私がいいたとき松沢におつたです。そのときには、ボーッととして、家の者が驚かれるという被害的な幻覚があつた。あの方が帰つてきて書いた、松沢病院のスケッチ的な詩、ああいうようなものも病気がすぎたし、まあ、そういう思ひ出の詩が書けるわけです。ですから、結局、あのころは松沢病院では、妄想があれば分裂病というふうにつけちゃつた。ずつと振り返つて千家完吾さんの詩を読むと、やっばりこれはうつ病だつたな、ほんとうに人格はおかされないで、感情だけおかされたんだなというあれがございすね。ですから私はやっばり、千家さんにはうつ病だつたと思ひますね。

楠 春原先生、文獻の面から、こういうものの価値というものをお聞かせ願ひたいんです。たとえば評伝というものが、信憑すべきものと信憑すべからざるものとあると思うんですが、お調べになつた場合、どういふもの

春原 実際にはつきりした評伝があると非

常に便利ですね。そのほかに家族の方の思ひ出とか、伝記があると。たとえば漱石夫人の、「漱石の思ひ出」などといったものが、藤村にもありますけれども、あれは晩年の奥さんです。あまり参考にはなりません。

楠 とにかくそういう家族や友人たちの思ひ出があると、たしかに参考になると思ひます。ところで野村先生、ある作家の病歴を研究しよとする際には、その作家に関する愛情がなければならぬのではないのでしょうか。きつてたんじや書けないと思ひますが……。

野村 メイビウスがニーチェを書いたつて、ほうとうに愛してゐるんです。栗野龍さんが翻訳の頭を書いてゐますけれども、ほんとうにニーチェが好きなんです。

春原 好きな作家でないと書く気がしませぬね。

楠 そういふ気持がなきやだめなんです

加賀 それは根本じゃないでしょうかね、同僚のつまり、自分が信憑する、あるいはひかれてゐる作家でなければ手がけるべきではない。というのは、愛情がないと、非常にわかりにくい病氣ですから、理解が途中で不十分になります。だからまず、自分が尊敬

する作家、あるいは芸術家でない手がけるべきではない。もう一つは、死んだ人ではないけない。生きてゐる人についてやるべきじゃないと思ひます。これは家族に對するあるいは子孫に對する配慮、一応、死んでからでない、礼儀的にもやるべきではない。もう一つ、私は原則をたててゐるんですが、なるべく発表された資料、文書、できたら作品、それから発表された書簡、そういうものについてやるべきであつて、あんまり微に入り細に入り、たとえば病院に入つていたときのカルテ、そういうものを参照したり、あるいは遺伝調査を詳しくやるということは、むしろこれは邪道ではないか。

楠 日記というものは、だいたい資料になるわけでしょう。

加賀 公表された日記なら資料になり得る。ところが公表されない日記がある。死後五十年後に公表しろという指定をするくらいで、いろいろ差しさわりがあります。まわりの人にとって、そういうことは、一応、礼儀上はやるべきではない。発表されればかまいません。

楠 一種のジントスがあるわけですね。

加賀 それを越えますと誹謗になります。

ある作家を狂気にしちゃうわけですから。
榎 打ち込んだ人に対する誹謗は喜ばしいものじゃありませんね。

加賀 まあ私自身は、病跡字をやるうえには今の三つの原則があると思っています。

榎 手紙というものは、私は非常におもしろいものだと思います。あれはやりとりした本人だけの間の関係をあらわしたもので、よその人が見るときには、のぞき見だと思っ

開き方をする人はどう思う人かと思つて、よっぽどえらい人だと思つて……。
野村 藪字者でしたね。
榎 ええ、調べてみると、教三という先生はえらい先生であつて、東館太郎さんなんか、非常に風貌がやばつた人だつた、まことに見ばえのない人だつたというんで、後藤新平の手紙をそういうかたちで破つても、おかしくない人なんです。ところがその中に書いてあることは、後藤新平に会いたということなんです。この間は会えなかつたけれども、いついつかに弾穴の調子の支社に来て会つてくれたという手紙なんです。それが大正十年なんです。十年の丹波先生の業績を見ると、当時、法規が変わつて、薬剤師が三千名、免許をもらえないことになつたらしい。後藤といえはその当時内務省ではことに医業関係では開然たる勢力のあつた人物で、二度も内務大臣をしたこともあるんです。だから丹波先生は三千名の薬剤師の免許をもら

後藤新平と丹波先生との関係をもつとさかのぼつて考えると、丹波先生は薬物というものを法医学に取り入れなければいけないという提唱をした日本で初めての人なんです。一方、後藤さんはいわゆる相馬事件に関係しましたね。あれがやっぱり後藤さんが法医学を日本にたてなくちゃいけないことを痛感した事件です。あれで牢屋に入つたんですから、その当時から、肝臓相照らすものがあつた人じゃなにかと推理できるわけなんです。そういうところを見るとのぞき見のおもしろさが手紙にはあるんですね。

野村 それは中野野夫さんが「人間の裏表」という本を書いて、ボートの場合でも、ホイットマン夫人との手紙のやりとりとか、そういう、非常に手紙というものは腹の底を語るんですねですから、やっぱり手紙がいちばん真実を語つているものといえましようね。
榎 私、後藤新平の手紙を一通、手に入れたんです。これが丹波敬三先生に出した手紙なんです。ところがその封筒の開き方がまことに乱暴なんです。ピリッと横に裂いてある。後藤新平の手紙を横に裂くような乱暴な

人の主治医宇田先生、大田氏の後藤先生などの縁の下の苦勞も顕彰されるべきと思ひます。
榎 パトグラフィの対象人物の肉体的病氣、眼病、胃病とか、これがパトグラフィにおよぼす影響が当然あるべきだと思つて、お、芥川の場合、閃輝暗点症があつた。あれをずいぶん長い間、見落とされてきたようなんです。ああいうものが、私はパトグラフィには、重要な意味をもつているものじゃなにかと思ひます。
野村 そうすると、主治医の先生は……。
榎 主治医の先生は発見してない。幻覚だと信じている。全然、認めてない。これは芥川が幻覚をもつてゐるんだという考え方で、それから例の晋山の大先生、あの先生も全然気がついてないんです。
加賀 斎藤茂吉ですか。
榎 ええ。斎藤茂吉先生のところには、手紙がたくさんいっている。コップシュニエルトが閃輝暗点症のためのものであるということを見つけてない。
加賀 あれは右側にくる猛烈な頭痛と片頭痛、それから光つた樹木。
榎 あれはやっぱり閃輝暗点症の状態で

野村 私は病跡字をやるのに、第一が作品の中に取り入れられた精神医学的素材というのが今日でも通用するほど正しいものであるかといふこととそれと家族というものが精神病者に対する愛情というもののが非常にこまやかなことが大事なポイントになる。ともかくヘルプして、病氣に陥らないようにする。そういう点では、いちばん大事にしなければならぬのは「習志子抄」の光太郎とか、「聖ヨハネ病院にて」の上林曉、大田卯という人のうづつ病を看護した住井すえさん、ああいう作品が出たということが、私は、知つておかないと、病氣になつた人が書いたの

と、一緒に病人をみつめた人、それがいちばん文献として皆さんが読んでいただかないと、パトグラフィをやる人間は、ただレタールをばらばらいんじやない。内村先生も「わが精神医学の道」でいっていらつしやいますけれども、そういう人物評論としての精神医学的な見方から、これは何病であつたというふう

にレタールをはることを目的としているんじゃないんで、全体の日本の文化の発達の上で精神医学というものの知識がどれだけ浸透したか。正しくどれだけ表現されているか。そして家族というのもの、一般民衆を代表した人として、精神医学の知識をどういうふう

に理解しているか。そういうことが齋藤井栄さんの「紙一重」でも、非常にそういうところのものいわぬ患者さんの味方として、そういう点を見ていくことが大事だと、そういうことが文化というもの、日本は文化国家といつて

いるけれども、そういうものが戦後、急速に発展しました。患者の心理の芸術的表現とか、欧米の場合と比べて、同じレベルになりましたよ。そういう点で今日までの日本精神衛生思想の普及ということは、文化の発達の一環として見られるんじゃないかと思ひます。そして習志子を治療した斎藤玉男先生、上村夫

と、一緒に病人をみつめた人、それがいちばん文献として皆さんが読んでいただかないと、パトグラフィをやる人間は、ただレタールをばらばらいんじやない。内村先生も「わが精神医学の道」でいっていらつしやいますけれども、そういう人物評論としての精神医学的な見方から、これは何病であつたというふう

にレタールをはることを目的としているんじゃないんで、全体の日本の文化の発達の上で精神医学というものの知識がどれだけ浸透したか。正しくどれだけ表現されているか。そして家族というのもの、一般民衆を代表した人として、精神医学の知識をどういうふう

に理解しているか。そういうことが齋藤井栄さんの「紙一重」でも、非常にそういうところのものいわぬ患者さんの味方として、そういう点を見ていくことが大事だと、そういうことが文化というもの、日本は文化国家といつて

いるけれども、そういうものが戦後、急速に発展しました。患者の心理の芸術的表現とか、欧米の場合と比べて、同じレベルになりましたよ。そういう点で今日までの日本精神衛生思想の普及ということは、文化の発達の一環として見られるんじゃないかと思ひます。そして習志子を治療した斎藤玉男先生、上村夫

と、一緒に病人をみつめた人、それがいちばん文献として皆さんが読んでいただかないと、パトグラフィをやる人間は、ただレタールをばらばらいんじやない。内村先生も「わが精神医学の道」でいっていらつしやいますけれども、そういう人物評論としての精神医学的な見方から、これは何病であつたというふう

にレタールをはることを目的としているんじゃないんで、全体の日本の文化の発達の上で精神医学というものの知識がどれだけ浸透したか。正しくどれだけ表現されているか。そして家族というのもの、一般民衆を代表した人として、精神医学の知識をどういうふう

に理解しているか。そういうことが齋藤井栄さんの「紙一重」でも、非常にそういうところのものいわぬ患者さんの味方として、そういう点を見ていくことが大事だと、そういうことが文化というもの、日本は文化国家といつて

いるけれども、そういうものが戦後、急速に発展しました。患者の心理の芸術的表現とか、欧米の場合と比べて、同じレベルになりましたよ。そういう点で今日までの日本精神衛生思想の普及ということは、文化の発達の一環として見られるんじゃないかと思ひます。そして習志子を治療した斎藤玉男先生、上村夫

ます。

野村 たしかにありますね。ニーチェのドラウコムを記載したのも眼科の先生で、し、眼科の先生は大切ですね。

加賀 今日のお話は、全然、私、存じあげなかつたんですけれども、閃輝暗点というところは、塩崎さんの本から知ったんです。

楠 塩崎さんは、私を見て書いてもらいました。それで、松本清張が芥川を取扱っています。ところがあれは見方がおかしいんです。私が芥川の「歯車」は教科書どおりに書いてあるということを書き表したわけなんです。そうしたところが、松本清張は、彼は眼科の教科書を読んでいたという。精神科の本は読んでたらしい。眼科の本を読んで、それにのっとって書いたものだという解釈をしたんです。清張の「芥川の死」というものがあります。週刊文春、あの中に書いてます。これは清張らしい創作で、なかなかおもしろいんです。ところが、残念ながら、私がひいた教科書というのは、戦後の教科書なんです。それで、そういわれてみると、私も意地になって、教科書を調べなければいけないんで、明治初年の教科書から、全部、調べたんですよ。ところが私の戦後に見た教科書

ほど、びったり芥川の書いたものにあつたのにも、ドイツ語のにもないんです。英語のにも、ドイツ語のにもない。ことにいちばんはつきりしているのは、閃輝暗点症がおさまって、頭の痛みもとれて、残像が残るんです。残像が残るところは、教科書のどれにも書いてないんです。私のところへは患者が来ますから、患者に聞いてみたんです、こういう症状が出やしないかと。患者は見るとい

うんです。それは僕のリン粉が散らばつたようなものが見える。こういうことが芥川のに書いてある。それと同じことを患者がいます。ですからあれは教科書を読んだものじゃないです。だけど、松本清張もうまいことを考える。だけど、ほかの精神科の本はずいぶん読んでるんです、芥川は。

加賀 「歯車」という小説は、精神医学的にいうと、あやしいです。あやしいというのは、つづられた部分がいづぶんあります。

楠 つづられた部分もあります。だけど、歯車の見える部分、あそこは実際に見えたそのとおりなんです。まったく教科書に書いてあるとおりであるし、患者のいう症状です。消えていって頭が痛くなる状態、じつに正確

に書いてある。ですから、こういうものは見落とさないようにしないと、たいへんな間違があると思います。

野村 やっぱり、精神科の医者がバトグラフをやる場合、全科の知識というものを正確に時代の変遷とともに勉強しないと、独断におもいる危険があります。

楠 おしまいに、野村先生、バトグラフの未末像というものをひとつ、語ってください。

野村 私は、現代像として、私の先生の森田正馬先生が、強迫観念というオブセッション精神のからくりというものを究明して、森田学説というものをつくつたんです。そして精神療法としてやつた。それに共鳴した人が、倉田百三なんです。「絶対的生活」という本を書きましたけれども、フロイド理論でなくて、森田理論でもって患者をなおす。神経症のからくりとなおし方を創始したんです。それが倉田百三が「なおらずになおった私の体験」だれにもある体験を神経症の場合には、自分だけ特異だというふうにして、だんだん織地獄に落ちていく。そこから、救い出すのには、こういうふうにして、だれにもあるんだ、おまえだけ特異じゃないんだというふう

なことを認識させるというやり方なんですけれどもね。そうすると、倉田百三伝を書いた亀井さん、そのつぎに高見順の「密閉恐怖」、そういつた神経症のノイロティック・パーソナリティ、そういつたものがあるんです。友だちの中村真一郎さん、それが昨年十一月の新潮に、高見順さんと中村真一郎さんが二人してお互いに影響があった、高見順さんが死んだから「小説高見順」というのを、昨年の十一月号ですか、「新潮」に書いているんですが、その中村さんのお話は、やっぱり、人間関係の中で、おれはどういうふうな役に影響を与えたか、彼はおれにどういふ影響を与えたかというふうなことを書いていらっしやるんです。これは非常に人間関係をほりさげた精神病理学的な点で興味があるんです。

もう一つは、さっき話に出しましたけれども、耕治人さんの「一条の光」、最近の自費出版のやつを、藤田一士さんが評論で書いていて、どうもポイントがはつきりしないというふうなことで、あまり高くかわないというふうな評論で、昨日か、書いていらっしやる。そういう点で、やっぱり、作家でも、病気をすると表現力が落ちるのかな。私は「一条の

光」というのを読んでない。自費出版ですか、手に入らない。そういう点で、バトグラフというものは、今までは精神を病んだ人たちのプライベートをむき出しにするんだ、今までは押さえられたけれども、今夜はプライベートをあびせて、バトグラフに役だつような資料として発表することができる時代がきたんだと書いていらつしやう。そういう点で、夜明けがきたという感じがする。そういう点で、私自身の未末像とすると、上田秋成にいきたいです。恐怖とは何かというところで、佐藤春夫の「上田秋成伝」からいきたいんですけれども、それには、やっぱり国文学の知識が、勉強がちゃんと重荷になってきうな気がしているんですがね（笑）。

楠 それはぜひ、やっていただきたいですね。どうも長い間いろいろ興味深いお話をありがとうございました。

「解体新書」にいたる道

—日本医学の進歩の跡を顧みる—(1)



司会

- 小川 鼎三
- 緒方 富雄
- 内山 孝一
- 大鳥 蘭三郎
- 矢数 道明
- 原 八郎
- 椿 三郎

原 本日は現在の医史学会の最高峰の先生方が全部お集まり下さって、ほんとうにありがたいございました。御礼の申し上げようもございません。私と椿さんは、今日はただ編集部の係りとして加わっただけでして、小川鼎三さんに司会をやっていただいで、われわれは自由に質問や発言をさせていただきたいと思えます。ただその前に私の立場でお伺いしたいのは、大鳥さんは専門みたいですが、お集まりの五人の先生方、みな非常に忙しい方が、歴史に生涯をかけておやりになつていゝる。その歴史の好きなところ、歴史に興味を持たれた由来とか、動機とかを、読者のためにごく簡単にお願いいたします。

小川 進行係りをやれということで、適任じゃないと思うけどいたします。

ぼくが医学の歴史のほうに入つたのは、ここにおられるほかの人にくらべて、比較的新しい人でありませぬ。実は、鯨の研究をやつておりました、シーボルトが日本の鯨を長崎ですいぶん調べて行つた。それを少し突きだめようとしたのが歴史のほうに入り込んだ最初なんです。その後、日本学士院……当時は帝國学士院ですが、明治前日本医学史というのをやるということで、私に解剖学のほう

を受け持つようにというお話で、そのときはまだ全然やっていなかったものですから大へん困つたと思つたんです。まあそういうことで……鯨の研究は自動的に始めたのですが、解剖学の歴史は前から少しは興味を持ってはいたけれども、どちらかというと、日本学士院が本をつくるについて一部の仕事を受け持たされたという、そういう他動的なところがあつたんです。

原 緒方さんは、歴史的な名門に生まれた背景というのが影響していると思うんですがどうですか。

緒方 小川君は歴史に入つたと言われたけれども、私はまだ入つたという意識がないのです。私の場合にはちよつとまた意味が違つて、家に少し材料があつたものですから、大学生時代にその一部を少し調べたのと、それから日本医史学会が昭和二年にできたとき私はその前に学校を卒業しておりました。そのときに、お前も出てこいという手紙がきたものですからフツツと出て行つたところ、まだ卒業したての若造なのに、なんとなく理事かなんかにされちゃつて……。小川君は言いませんでしたけど同じだろうと思うのですが、私たちの歴史研究の方法は、自然科

学的な方法で、実証的に突きとめていくというわけですから、私でもできる。またいろいろわかつたときはやつぱりおもしろいですね。ゴチャゴチャしていたものが整理されて、すっきりしたときのおもしろさ。それは自然科学の場合と全く同じです。それに尽きますね。

原 大鳥さんは専門家で読売のほうだけ



(小川鼎三氏)

ど、どういふことですか。

大鳥 ぼくは、いまの小川先生と入り方がいくらか違つているんです。私が昭和七年に大学医学部を卒業したところが、ごらんのように臨床にも向かない。さりとて基礎の研究のほうもできそうもない。なにをやつたもんだらうかと困つたところが、藤浪先生がおれのところに来て、古い書を読めという命令が

あつたんです。その当時の命令というものはいまどきと違つて大したもの(笑)、いや、そうしましようということになつて、藤浪先生の門下に加えていただいで古い書を読んでいるうちに、いつとはなしに医学史を専攻することになつた。富士川先生の講義は学生時代から何つておりましたし、歴史のほうに関心はなかつたんですけれど、私の親父が本道業でして、非常に本を集めていたものですから、そういうことも多少関係しているかもしれない。

原 本と歴史は密接ですね。内山さんはずいぶん歴史が長いことは知つていますが、数年前、国際生理学会があつたときに内山さんが責任者だつたんですけれども、その生理学の歴史の上に日本全体の歴史を加える。そのときばくも薬理学の歴史の立場で加わりまして。

内山 原さんのおっしゃる通りで、私が医学の歴史に入つていったのはその前があつたんです。中学時代から、人類学、考古学というようなことが好きで、神奈川県あたりの貝塚、あるいは横穴、そういうものを歩きまわつてね。集めて……しかし、関東大震災で石斧であるとか、土器の破片とか、そういうものを

みんないけなくしちゃったんです。そういうものは二度と戻ってこない。つまり、歴史は繰り返さない。そういう貴重なものは自分で持っているべきものではなく、博物館などに委託するのがほんとうだと思う。そういう下地があって、さて生理学を専攻するようになりましてね。私の若い時分、つまり一九二二年ごろの話ですが、誰も日本の生理学の歴史なんていうのはやるものがなかったんですよ。つまり、日進月歩の新しい研究、実験的な研究には熱中してやるけれども、歴史なんていうものは過去のことであって、これは問題外だ、と。紙屑みたいなものを集めて喜んでるのが、歴史をやろうという連中ではないかというようなことまで言われた時代なんです。しかし、どんな学問でも芸術でも、歴史のないものはありません。広い意味において文化史は人間の歴史を示している。そういう大事な面を誰もやらないので昭和の初めごろから、いわゆる古本、根本史料を集めなければ、さつき小川さんや緒方さんがいったように、歴史の研究も自然科学的な手法でとことんまで真相を究明するということがまず大事だという話がありました。人の書いた本を採引していったって、新しいことは全然出て



(緒方 富雄氏)

あった日本学士院で、日本の科学史の編集委員会があって、第一巻に私は生理学、小川さんは解剖学の歴史をお書きになったわけですが、さつき、かけ出したと小川さんが言われたけれども、あの学士院で編さんした小川さんの書いた「日本解剖学史」は名著と思います。館のこともお話しがありました。私が長くなるから私は省略しておきましょう。

こないんです。ところが日本では、医学の図書館は完備したものがありません。自分で集めるより方法がないんですね。アメリカとかほかの国では、実に立派な図書館があって、そこに行けばなんでもすぐ研究の材料は整うわけですが、わが国では自分で集めるよりしようがない。そんなことを言っているうちに、先ほどお話し

原 矢数さんはどんなぐあいですか。

矢数 私は医学校に入る前から、東洋医学をやりたいという考えでした。漢方をやるにはどうしても古い本を見なければならぬ。とにかく、古いほど価値のある本が多いので、勢い歴史に注意せざるを得ないし、それをやらなければどうしても漢方の研究ができないというようなことで学生時代から、富士川先生の日本医学史や古医書を求めて座右に置いていました。しかし正面からの歴史学研究というようなことは全然できませんでした。全く断片的な、その場の思いつきの事項を調べてきました。私が最も早く史的考察を試みる機縁となったのは昭和十四年に、「国幹氏再考先生を懐う」という一文をまとめたことに始まるのです。明治七年漢方

の禁止令が出されたときから以後二十年間、その存続運動を続けて孤軍奮闘した、尾州徳川家の侍医として十代続いた浅井国幹が書き残された「墓に告ぐる文」という一文文章を読んで、非常に感激を覚え、その当時の歴史を中心に、その後の百年史の発掘に情熱を傾けたわけなんです。しかし私の師匠の森道伯先生は漢方の後世派に属する方ですので、やはり中世以後田代三喜や曲直瀬道三とそれ以後の漢方治療の変遷ということについて興味を持っておりません。

原 あとは小川さんに司会をしていただくわけなんです。ただ、編集部の一人として考えましたのは、今日の話をどのような範囲で伺えばいいかということ。矢数さんにもちょっと伺いたいのは、具体的に漢方に入った時代ですね。それから南蛮医学に入っていました。その次に、これは小川さんの解剖を中心にして、特に日本では小塚原の腑分とか「解体新書」が出るとか、次にシーボルトだとか、少し飛びますが福方塾はじめ、塾からして、東京大学医学部百年史を精読しまして、東大自体でさえ系統的で、百年前は非常におもしろかったんですね。人がやっているような気がするんですね。建物がやっています。



(内山 肇一氏)

じゃなく、まあ、そんなように私は感じたんですが、読者の立場からして多少全体的なこととも教えていただき、あとはご自由にお話ししていただければいいと思います。小川さんに司会者としてお願いいたします。

小川 一五〇〇年代、つまり一六世紀ですが、その半ばに南蛮医学の渡来があって、それまでの日本の医学、医術に、新しい空気が若千入ってきたのであります。その後、南蛮医学はキリスト教の禁止で後を絶ったわけじゃないが、間もなく衰退いたしました。その当時というか、ずっと江戸時代を通じて、漢方が日本の医学の大勢をなしていくわけがあります。もともと支那の医者が日本で行なわれたのは非常に長い歴史があるのですが、その最初からという大へんことになるので

得て、豊臣、徳川にも重んぜられた。先年私のところで発行しております「漢方の臨床」という雑誌で、「日本の漢方を築いた人々」という特集号を出版したことがあります。

日本の漢方を切り開いたのが、この金元の医学を輸入してきた田代三喜に始まり、それから曲直瀬道三以後の各時代を代表する日本の医人のその頂点に立つ十九人を運び、明治の浅田宗伯までとりあげました。江戸時代の中頃、吉益東洞を頂点とする古方が抬頭し、やがて幕府医学館を主宰する多紀家が折衷説を唱えるようになり、歴史的発展をくり返してゆくのですが、江戸時代古方が盛んになり、金元の医学が衰退するようになると、古方家の中から蘭学を学ぶ人がたくさん出てきました。李朱医学はとくく観念論が多いので、臨床論に基いた実証的なものが蘭学に通ずるものがある、蘭学を導入するようになった。漢園折衷派の中から世界的な発見、創意工夫をした人がたくさん現われ、それが明治初期まで受け継がれてきたが、ドイツ医学がこれに代り、太平洋戦後はアメリカ医学が入ってきたということになるかと思えます。

韓 朝鮮の医学というのは入りませんか。
矢数 それが古墳時代、飛鳥時代、一番最

初は、韓国百濟の医学が入ってきて朝鮮と日本の交流は相当頻りに行なわれていたわけですね。三木榮先生の朝鮮医学史に詳しいことが述べられています。

原 漢方の人が解剖したというのは。
矢数 山脇東洋ですね。

小川 いまお話をあつた古方派の大家であつて、その解剖は一七五四年、京都で行なわれました。

原 あれが最初ですか。
小川 公けの許しを得たものでは確かにそれが最初だと思います。有名な小塚原辨分よりもだいぶ早い。いまの矢数さんのお話で、日本で行なわれた漢方医学の大体がよくわかりました。二、三日前に、千葉でなされた日本医学史学会の総会の会長講演で、千葉大学の鈴木宜民教授が金元の医学の中に現在の医学から見ると、大へんすくなく驚くべきものがあるということを発表されました。李東垣の蘭室秘蔵とかいう本の内容ですが、糖尿病のことを西洋に先んじて詳しく書いていて、糖尿病で眼の症状が起きて、しかもその治療法でいろいろ書いてある。それを鈴木教授がやってみると、効果があるようだということで、貴重な発表でした。

したドイツ医学を必要としたということも当然と考えられますね。

緒方 周囲の事情はわかりますがそれは日本の多くの漢学者のように、中国の医書をたくさん、よく勉強をして、この説は理屈が合わないとか、向こうのほうが筋が通るということであったのか、それとも、医療を實際にやってみて、実証的に改良されて変つていくということではなかったのか、古医方が主張するまでは、それほど実証的ではなかったんですか。

矢数 宗教医学と分離して実証的な方法を導入しようとしたと思うんですが。

緒方 そうしたら、古医方が、なぜ古い医書に書いてあることのほうが良いと言いつたんですか？ やはりそれは学説的に間違っていたのですか？

矢数 李朱医学は当時の性理説を基礎とし、思辨的であつたし、その仮説に固執し過ぎたことは事実で、また古方とは考え方に於いて相当の開きがあつたように思われます。古方の方がずっと実証的だつたと思います。

緒方 そうすると、実証と言ふけれども、杉田玄白たちがオランダ医学をうけ入れたのは、かれらなりに実証的に考えた結果ですか。

が、この実証に対する反対みたいなものは漢方になつたんですか。

矢数 ありましたね。蘭学的実証に対してはとくに反対したようです。吉益東洞一門は傷寒論に徹底し、その他の医流はすべてこれを否定し、素問も靈樞も、李朱医学も、まして蘭学などはこれを排撃した。ただ傷寒論の実証的なところに徹した訳ですね。



(大島園三郎氏)

緒方 それはただ漢学の一つの学派としてあつたんですか。主流になつたんですか。

矢数 日本の漢方の特徴はこの古方派が主流となり、後世派、折衷派と鼎立しつつ時代の発展をしてきたところにあるように思われます。この思想は今日もお生きていると思われれます。多紀家も蘭学の実証(主として解剖)には反対し、強い圧力を加えたといわれ

緒方 矢数さん、ちょっと伺いたいんですが、支那なり、朝鮮なり、それぞれの国の医学が日本に入ってきたという、その動機はなんですか。明や元の医学が入ってきたというのは、それがすぐれていたからというのですか？ それを日本でいじくつたというのは、どういうことですか？

矢数 やはり時代の流れというか、変遷で、新しいものをとり入れて向上しようとする歴史的発展と考えられると思います。また時代の背景というものが密接に関与していると思われれます。たとえば戦国時代にはその当時の人々は食糧が欠乏し、精神的に疲勞している、農補強壯の金元李朱の医学が必要となり、江戸時代の太平の代になると、ぜいたくになって、古方の攻撃療法が歓迎されるようになる。太平洋戦争のときも同じでした。医学の変遷には必ず時代の背景があるように思われれます。曲直瀬道三は中国の多くの文献を自分の治療経験を基にして一目瞭然図表化しているが、当時の日本の国家状況が李朱医学を求めたともみられます。その意味では明治政府が富国強兵、産業開発を目標とし、軍隊を充実し、工場を経営してゆくためには集団治療、社会医学、軍隊医学の発達

ていますね。

小川 徳川時代になって日本は嚴重な鎖国になるわけですが、その一六〇〇年代……つまり一七世紀に長崎の出島が日本の唯一の窓口となつて、西洋のことはそこにくる少数のオランダ人を通じて日本人に伝わるわけですが、西洋医学がくわすかながら日本にはいつてくるのですが、そのころは大島さんが特に「蘭館日誌」などで詳しくお調べになつておるので、初期のオランダとの交渉の中で、なにか医学史におもしろい話がございますか。

大島 実は私は、一七世紀におけるオランダ医学の日本への導入という話を話したことがあるんですが、その話を聞かれた相当な知識のある方々が、なんだ、日本における西洋医学というのは、「解毒新書」が入ってくる前にもうすでに行なわれていたのかというように質問をされた方がありまして、実は私も少々驚いたんですけれども、まあ、それも無理のないところもあるかもしれませんですが。一七世紀、一六四二年ごろの長崎の出島のオランダ商館には、外国人の医者が来ておりました。もちろん嚴重な制限はあつたのでありますが、しかしながら、オ

と良訳とがクルムスの解剖書をもっていました。簡単な解剖書ですが、簡単なと言っても、オランダ語で書かれて、解剖図がたくさん載っている手ごろな本であったのであります。彼は解剖所見とその本の図がよく一致することに大へん感激して、さっそくその翌日から、クルムスの解剖書、いわゆる「ターヘル・アナトミア」の翻訳にとりかかりました。そして大へんな苦心を重ねていく。これは今度は緒方さんにお話をしていたたぐのほうがいいと思うんですが、三年半ぐらいかかった。しかし、実際には一応の翻訳はかなり早くできたらしいのです。

原 小川さん、その三人の先生はどうして自分でやらなかったんですか。メスを直接持つて……

小川 その当時は、地位のわりあい高い人は自分で死体にメスをつけない習慣だったようで、低い階級の人だけがそれをやるといふことであつたらしい。西洋でも初めはそういう傾向がありました。しかし日本では、小塚原よりもっとずっと前に、一七五九年、長州の萩の解剖で医者が手を下したという記録が残っております。一七〇〇年代の終りになると日本でも医者が自らメスをとっています。

原 それは歴史的に？
小川 一七五九年の萩での解剖は田英仙という医者がメスをふるったという記録があります。

緒 東洋のやったのは、なにか解剖書を見ながらやったんですか。

小川 見ながらやったとは書いてないが、蛮人の作った解剖書の図と実際の所見がよく一致することを書いてある。蛮人……この場合はつまり西洋人ですね。その蛮書はおそらくウェスリングの解剖書だろうといわれています。

緒 その死体は女ですか、男ですか。

小川 最初の山脇東洋の場合は男です。小塚原のは女ですね。その「解体新書」の書き途中のことを、緒方さん、少しやって下さい。

緒方 まだわからないことはたくさんあるんですけども、まず「解体新書」をどうやって訳したかということ。聞きかじりのオランダ語は前野良沢だけが知っているという程度で、とても解剖書が訳せるほどでなかった。それをどうやって訳しただろうということの疑問です。これは玄白は蘭学事始のなかではっきりは書いていないんですけども、

たとえば……有名なフルヘッドという字

の訳を一日考えたということが書いてありますね。それを小さな辞書で引いたら、枝を切ったあとがうずたかくなり、チリをあつめるとうずたかくなるというような解説がしてあるのを読んで、ハタと理解したということなのですが、その解説のオランダ語をどうしてつかんだかという問題は、いまでも疑問なんです。前野良沢は、オランダ語文の訳し方の要領を書いています。それが、要するに漢文と同じだということです。まず、オランダ語の一つ一つに訳語をあてる。たとえば「骨」という字があつたら、「我」という訳語を「骨」に書いておく。My bone というのがあつたら「骨」という字を書く。bone book には、「一つ」「本」とあてる。そうすると「我持一本」となる。それから文式に考えてみるという。そうすると、「我一本を持つ」ということになる。そうやっていけばいいんだ、というわけです。当時の翻訳というものは、それで通つたらしいんですね。ですから、少し長い文章になつて、前後のつながりがこみいったものになると、どれがどれにひかかるかわからなくなってしまう。多分これが一番常識的な意味だろうと思つて、そう訳すると、ガラ

リと間違っていたところもあるわけです。それは当時としては止むを得ないことだったと思います。ところが解体新書の場合は、幸いに解剖のことで、事実がわかっています。要は、どう表現してあるかだけである。骨のことが書いてあるとわかっただけのことか、骨がどうなっているかなど、このことは、実物の図があるんだから大体は推量がつく。例のように漢文式に字を並べてみて、これはこういうふうにならなければならないんじゃないかということをやったんです。小川君、解体新書の本文の訳語は？

小川 それは大体うまくできています。
緒方 それなのに、原著書の序文の訳となく全然気の毒なほどだめ。

緒 序文をそのまま訳したわけですね。

緒方 そうです。それが無理なことは、いまいったような事情でよくわかります。この翻訳法は、解体新書ができたあとで、玄白の門に入った大隈玄沢もやっています。玄沢もちゃんとこの方法を例をあげて書いています。要するに漢文のように引っくり返して読めということ。それからあとになると長崎のオランダ通詞のなかにほんとうにオランダ語が読み下せるようになってきたんです。

中野柳園などという天才的な男がいて、いまのように、読み下して理解できるようになつたのです。玄沢は書いているのですが、この「ひっくりかえり」の読み方は自分が最後で、これからはほんとうに読めるだろうといっています。そういうことではいろいろ苦労して読んだ。

さて、「解体新書」の翻訳の仕事ですが、



(原 三郎氏)

実際は大体の訳ができていたのは、おどろくべくはやいのです。小塚原で腕分を見てから（一七七一）年、一年半経って大体本文は訳せている。そして、序文のようなものを書いている。そして次の安永二年（一七七三）の正月に、もう解剖約図を出しているわけなんです。もつともそのころの玄白の手紙に、まだもう少し限らし合わせたいところがあるの

で、まだ出版はしませんが、解体約図のほうはできましたと書いています。だから、ターヘル・アナトミア本文の大体は一年半経たないで読めたことになる。大へんなものですよ。驚きました。

緒 その時は辞書があつたんですか。

緒方 ありました。しかし蘭辞書ですから、その蘭文を理解することが大変だったはずなんです。

「蘭学事始」には、四年にして十一回稿を改めたと書いていますが、それは細かなところをまで整備するのに要した年月と回数であつて、大体が訳せたのは、実に一年半ぐらいいです。それほど彼らは熱心をやつたし、幸いに解剖の本だからわかっただんじやないでしょうかね。しかも、そのころかれらはオランダ語の解剖書を四、五冊持っているんですよ。ターヘル・アナトミア以後、次々と仕込んだのでしよう。現に、「解体新書」のなかに、これらの解剖書の名が出ています。図もそうです。いろいろな著書の図をとりいれてある。クルムス以外も紹介してある。そのうえ、自分の考えも入っているんです。それは驚くべきものだと思います。

小川 〃 翼案するに〃 という言葉がところ

どこかに入っています。「翼」は玄白自身の本名ですね。「玄白」は通称というべきでしょう。

細方 ただ、訳さなかったのは、原書のほとんど毎ページにある脚註です。それは訳さなかった。おそらく訳せなかったのでしょう。

小川 その脚註を訳さなかったことが、彼らの成功した非常に大事な点だと思えますね。全部訳したら十年間かかったと思う。本文の大きい活字の部分だけ訳したということが、結局「解体新書」の成功したゆえんです。

細方 なかなか要領のいい人たちですよ。(笑い)

大鳥 それからもう一つ申し上げますが、日本語に訳したと云って、「解体新書」というのは漢文で書かれている。漢文というのは、見方によれば便利なものでして、ちょっとわからないウヤムヤでも、うまくやったら……(笑い)。だから杉田玄白という人は、よっぽどそういう知識のたけた人なんですね。

細方 それと同時に、非常に見過しのいい人ですね。決して脇道に大きくそれない。こ

のことも蘭学事始めに書いてあるけれども、これときめたらそれだけやるんだ、ということです。例は現代的になるけれど、野球で打者がカーブを拂って直球だけにしぼって打つ、その要領です。ターヘルアナムミアを訳して、本にして出す。ここに目的にしぼって、一途にやりとげた。前野良沢なんかだったらゴタゴタして、センサクばかりしていてでき



(横八郎氏)

ていなかっただけかもしれない……。

小川 だから前野良沢と杉田玄白は、あの本を出すことでおそらく気持がかなり離れたんじゃないんですか。

細方 玄白は実業家ですからね。

大鳥 そのときはほんとうにオランダ語がうまかったのは、前野良沢だけなんです。

小川「解体新書」の挿絵は木版ですが、秋

田舎の小田野直武という人が描いたんです。いろんな本から集めて……。

小川 タルムスの解剖書の絵は大部分載せてありますけれども、そのほかの教種類の解剖書からとった絵を載せているわけです。

細 実際に解剖した図というのは載っていないんですか。

小川 それはないんです。

今度は内山さんにお聞かせしたいのですが、この「解体新書」をもって蘭学が始まった。つまり、オランダ通事を介しないで、医者自身がオランダ語のある程度読めるようになった。それには玄白や良沢の一番弟子であるところの大隈文沢の功績が、非常に大きいのでありますが、ところが、だんだん翻訳だけでなく、向こうの言っていることを実際のものについて調べてみようという気運が強くなってきたわけです。そういう点でお話し願いたいのですが。

細 話しはいいよ面白いくらいに入ってきましたが、今日は「解体新書」までのことにしまして、「解体新書」以後のことを来月号でお話し願いたいと存じます。

(昭和四十五年六月九日
於・犀宿南園酒家)